

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 86: 64-104
Issue date	1901-06-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5199">http://hdl.handle.net/2298/5199</a>
Right	

# 雜報

## 寮生之美舉

龍田の嵐翠、舊に因りて稷々、白川の奔流、舊に因りて淙々たりと雖、本校の氣風、日を趁ふて洗滌しつゝありと皆、人の慨する今日此頃、吾人は此美舉を聞きて、健兒の意氣、尙ほ潑々として、一道の白光を射るものあるを見て、轉た意を強ふせずむばあらざる也。

濟々聳生徒、中村、杉の二氏、才氣雋秀にして、而して家道困難、遂に牛乳を配達して以つて、學資に給するに至る。其の獨立卓行、苟も人の助けを受けずして、已れを維がむとする、其志や已でに以て珍とするに足る、況むや才高くして、學力恒に衆を抜く、誰か其氣の盛なるを壯として、其情の切なるに感ぜざらむや。三部二年、行徳俊則君は素より慷慨多涙の士、這般の

事を聞き笑ふ動かざるを得むや、即ち自ら首唱して、吉田清志、上田徹、勝正憲、高橋久太郎、八田千町、志波原論一、阿形輝司、副島豫四郎、村上伸雄九氏の賛助を得て、寮生一般に檄して、義捐を募り以て、此不遇の士に、一日の勞を補ふ所あらむとせしに、金殆むと十六圓、書籍三十冊立ちに醸まる。行きて之を贈る。二生感涙滂沱として、作立して殆むと辞なかりしと謂ふ、聳長亦書を裁して、懇ろに我れの厚意を謝す。説くを休めよ、龍南の氣風甚だ凋落せりと。人或は以て、這般の些事敢て大体を觀るに足らずと謂はむも、これ不知の言のみ、額や小なりと雖、素是學生の爲す所笑むを初めより其多きを求めむや、唯求むる所は、義に激するの眞情にあり。嗚呼山を漂はすの望みも、自ら此裡にあらむのみ。殊に此舉が、校風の中堅たるべき習學寮より發せられたるは、吾人の深く欣ぶ所なり。

## 東京だより

何か東京のたづれを書けとの仰せ、幸ひ今日は、我皇太子殿下に第一の親王殿下の御誕生あらせられたる御慶びに、學校も休業となりたれば、何か書綴り貴意に應へ申べく候。偕て机に向ひて筆とれる今、近所の寄席にて客を招く太鼓の音ドン／＼／＼ときこゆ、應て七時になれば、上野の鐘の靜かにたゞそかにゴーン／＼と響き出づべく候。吾等はこの二つの聲の中にもまた東京をさ／＼うべし、ドン／＼／＼に行く者もあり、ゴーン／＼に就くものも有之候。小生は今少し前例の散歩より歸り來りしところに候。散歩といへば、小生の最も屢々する處は上野の森、不惑の池畔にて、毎夕の眺めも決して飽くこと無之候。殊に此頃は紅の緑にうつりて、綠葉の日々に綠をまです行くさま、訪ふ毎に景色新なる心地致し申候。池を廻りながら眺むれば、東の方には若葉の木隠れに、かの精養軒の近なるベンキを塗りかへたるが新装して立ちつ、其庭には霧島杜

鵲花層々に點綴して燃ゆるが如く、藤棚には蕾多き房の未だ短かきがさがれり。西の方は大學高等學校等の建物、夕の光に映じて聳え、殊に岩崎邸の洋館の尖塔、常盤樹の木立を超えて青空の中にみわたさるゝなど實に一幅の西洋畫を見るが如くに候、池の周りを廻燈籠の影人形の如く駆けまはる自轉車の姿も、今は早や漸く去り行きて、僅かに一つ二つ洋装の若紳士が、春輕き上衣の裾を風にふかせて走るが見ゆ、其長安才子の上衣を翻ねず春風は、池の面に漣波を起しつゝ吾等の面を拂つて過ぎ、上野の森の梢にサワ／＼の音させて、谷中の奥深く入りぬ。不如歸の宿りにや通ふらん。池の中には未だ去年の蓮のかれ莖の、野分木枯らしに折られたるがその儘に残り居て、いとさびしげながら、所々に小さき蓮の浮葉の青きが見えつゝ岸邊の隅々には、落ち／＼し八重櫻の花片の、風にふきよせられてかしこゝ、薄紅の色を青みわたれる水の上に點せるなど、無風流の小生にも何とか

歌はまほしく感ぜられ候。ア、思はぬ事に筆走らせ申候が、こは予が領分にあらず候。東都の春色は己に其人ありて報せられし事と存候。拙き筆に貴き紙面を汚かすことを止めて、いざこれより少しく我が校内の状況を御知らせ申すべく候。それも他の科のことどもは其科の人々にゆづり、小生はれのが領分なる哲學科一年のことにつきて申述ふべく候。先づ學課目は大學一覽にて御承知の通り、正科としては、哲學概論及西洋哲學史、社會學、佛教、論理、及英佛獨の三外國語の中二ヶ國語を擇ぶ譯に候。總じて一週十八時間、最も其他の隨意科に出づれば果てし之れなく候へ共、多くの我級の學生の出席する時間、中島文學博士の倫理學史及社會倫理、松本文學博士の實驗心理學、桑本文學士の認識論にして、其他撰擇二ヶ國語以外の外國語、根本博士の易經、高楠博士の印度文學と佛教、前田慧雲氏の天台宗教義、ケーベル氏の諸種の宇宙觀評論、及希臘語等に出席する人も有之、これらを合

せて凡そ廿五六時間に相成候。

哲學は徳高きを以て有名なるケーベル博士の受持にて、博士は極めて平易に簡略に、又よく要を摘んで講義さるゝが故に、吾々初學のものにも甚だ理解し易く、且つ講義中に所々滑稽を交わられ、乾燥なるべき哲學の講義も中々面白くさかれ候。學生の多數は何故か厭うて之に欠席するも、予は諸君が來られん時は非之れに出席あらんことを勸む。氏は露西亞人にて、獨乙語、佛語等には巧なれども、英語には熟せられざるを以て、初めは聞きにくけれども、慣るれば英米人が早やく話すよりも却て分り易く候、氏は實にクリスチャンのモデルども稱すべきものに候。社會學はドクトル高木正義氏の擔當なり、氏は快活暢達の人にて、其講義中に種々の時事談、處世談等を交へ、吾々をして教室の中にありて活社會に接するの思あらしめ、社會學の講義以外、愉快と利益とを受くること尠なからず候、佛教は東洋哲學の名の下に、村上專精博士

之を講せらる。吾とは一見博士の風采の案外なるに驚き、次て其元氣の盛なるに驚き、やがて其講義の簡明なるに服し、又其近世智識に通ずることの、從來佛教僧侶の數等以下にあるに感歎申し候。其の講義の内容は兎に角、彼の複雑錯又せる佛教の教系を分解統合して、其の大觀を一目の下にわかれたるの技倆は、確かに佛教僧侶中の出色にして、吾々如き初學者は佛教研究の端緒を、博士に開かれたるを感謝致したし候。論理は中島博士の講坐にて、今學年の講義はアリストートルの學術解説、と近世科學の研究法及び其の根本思想とにて候ひき。氏の講義は少し聞きとれにくき恐れあり、宜ろしく前方の席を擇らんで坐を占むべし。しかし氏は眞面目に忠實に、眞個學者的に講義せらる。アリストートルの方はたゞ簡單なる解説に過ぎざれば、固より面白き筈なし。近世科學の根本思想の方は、氏が得意の見解らしく講義に活氣あり、餘程面白く感歎申候。社會倫理の方は大分趣味あ

る由なれど、小生はこれに出席致さざりし故、こゝに申述べず候。英佛獨の中小生は英語と獨乙語を擇ひ、佛語へは隨意科として出席致し候へ共、これは矢張佛語を選ぶ方得策と存し候。佛語を知るの必要は哲學宗教上にも、文學上にも大に有之、且つ隨意科として置きては漸々出席を怠たるやう相成り候。佛語の教授はエツク氏にして、恰かも高等學校に於けるジャーマン、コース的に鍛はれ申し候。英語の方は曾つて貴校にも教授を執られし小泉八雲氏、即ちラツファカチオ、ヘルン氏にて、十分は聞きとれなどテニソン詩集の講義また面白く候。獨逸語譯讀の方は上田整次氏講師にて、アイヘンドルフのタウゲニヒツを教科書とし、文學博士フロレンツ氏はシルレルのバラードを、講義せらる、これは英獨打交せての説明故よく分かり申候。松本博士の心理、有益にて面白し。桑木講師の認識論、得意の由なれど、大分難解にして乾燥無味なれば、少少の辛抱を要し申候。以上にて

先づ一通り學課の紹介は終りたれば、これより一言御注意を呈したく候が、其前にも一ツ、ケ―ベル氏の諸種の宇宙觀評論についてのべん、これは隨意課なれど、甚だ有益にして且つ趣味ある講義なれば、是非出席すべきものなりと思ひ候。ホジヂビズムより始め、今マテリアリズム、パンセイズムを終へ、これよりセイズムに移り、最後にクリスニティーに到るものにて、講義完結の後は印刷に附して出版せらるべしとのことに候。

偕て御注意と申すは他の事にあらず、諸君が高等學校にあるの日、即ち大學に來らるゝ前に、出來るだけ多くの體力と語學の力を養ふに、多慾ならんことに候。これは分り來つたることで、諸君また必ず孜孜として勉め居らるゝ所ならんも、諸君が大學に來らるゝの日、必ず尙諸君がこれに勉むるの足らざりしを悔いらるゝならんと想像するものにて候。予は諸君の多幸なるを羨む、何となれば文部省は今學年より

學制を變更して外國語の時間を大に増したればなり。予は諸君がよく之を利用して、大に語學力、殊に獨乙語學力の修養に勉められんことを、切望に堪はず候。予は固より高等學校の生徒を多忙ならせんとするものにあらず、されど大なるものゝ爲には、小なるものを犠牲にせざるべし。へからず、語學の爲めには自餘の學課は犠牲に供すべし、諸君にして眞に學に志めあらば、語學の勉強の爲に一年の落第位は、惜むところにあらずとまで申したく候。己でに大學に入りて後は、智識の慾盡にして、徐に語學の力を養ふなどは、餘程の決心なくては、馬鹿らしくて出來不申候。小生がかくまでに口を酸くして、否廻らぬ筆を廻まして申すは、小生の現狀が實に齒がゆく堪らねばなり、思想の大海は渺茫として、際限なけれども、われは徒に岸頭に立つて、彼方の空を眺むるのみ、たゞこれわれに語學力てふ船のこれを航すべきなきが爲めに！。圖書館裡の藏書甚だ豊なりとはいふべからざるも

尙多くの財寶はここに充てり、われは徒らに其門戸に立ちて、中なる人々の歡聲をきくのみ。たゞわれに語學力てう鍵のこの寶庫を開くべきものなきが爲めに。しかして予は思ふ、諸君が有害無益の菓子に投するの金錢を變じて、滋養の料となし、餘り益なき雜談の時を集めて、江津湖上に浮び、十間分の休息時を利用して、共同的遊戲に樂み、以て善く遊び善く學ぶの風を養成せは、諸君が体力の増すと共に、學力の加はり來るは勿論、近頃世に八釜敷風紀問題の解釋もまた其中にあらんと信じ候。これらのことを決行する、容易なるが如くにして實は甚だ容易ならず、斷乎たる改革の精神と意志の力とを要し申候書し來つて予は自ら予の迂なるを知りぬ。予が諸君と辭して以來、龍山の松風を聞かざること殆んど一年、焉ぞ知らん、諸君が體育に熱心なる、諸君が語學力の進歩せる、果た又校風の振起せる、生等がありし日に比して天と地との差あることを。果して然らば子また何をかいはん、只諸

君の多幸なるを羨み、又予が繰言の徒勞に歸せしを大に悦ぶのみに候。諸君と東都に會せん日、予は依然たる吳下の阿蒙にして諸君は三日見ぬ間の櫻花ならんには、予は自らの愚に耻ぢんよりは、むしろ諸君の爛熳馥郁たるに酔ひ樂まんかな、先づは一輪を裁して諸君が龍南學窓の机下に呈し候。文粗意不達多謝再拜。

### 龍南だより

◎新緑の本蔭なつかしき初夏も終に來り候。隨て諸兄が敬すべき父母、親しき弟妹と暖なるホームをなすの時期も漸く近きたる事と存候。さはれ休暇てふ極樂に達するには一大難關を通りこすの必要有之由にて、蚊や蚤の攻撃にも憶せず諸兄は精々其の用意に御勤勉の御事と存じ候。蓋し頃者血を吐くは杜鵑のみに候ふまじきか。

◎諸兄の孜孜として學業にいらしめ給ふを見ては、怠慢ある雜報子の如きは穴にも入たき心

地に候。さあれ若し其勉強が或二三の惡口小僧が申す如く、單に試験のため、點數のためにて候は、甚だ遺憾至極に候へ共、斯の如きは九州の野に雄視する我校に萬々ある可からざる事と存候。

◎文字を鵜呑みにして吐き出す位の事は鵬鵠も之を能くするは賢明なる諸君の先刻御承知の事と存じ候へ共、試験點の算用に敏き人には間々かゝる傾向を認め候。要は眼光紙背に徹する底の讀書を望ましく候。筆記の訂正位に齟齬たる方は到底大臣となり、はた世界の大文豪となり得べからざるかと存候。斯くいへばとて穴勝に尾崎君の説にかぶれたるでも何でもなく候。

◎或老人は申され候。今の書生は學校にある間に既に業に卒業後の給料を請じ居れり、斯の如くては、裏屋住ひの八公、熊公と何の撰ぶ所ぞと。

◎二行足らずの言に候へ共、こは日本の武士氣質の眼に映したる現今の書生の状態に候。高

七十

襟黨は斯の如き現象を以て、社會の拜金主義が學生社會に迄反映したるものとなして、ほくろにみ給や否やは雜報子の知らざる所に候へ共、兎に角學生が大に衣食問題と接觸し來りたるは確なる事實に候。

雜報子如何に吞氣なればとて、諸兄に對して霞を肉汁とし、露を麵包として生活し給へとは注文致し候はざる故、先は御安心あつて然るべくと存候。さりながら學生にして生活問題と接觸するは如何のものに候や。一面より見れば、學生が秩序的になりはじめたりと喜ぶべく候、換言すれば、從來學生の金看板は唯一の磊落にて候ひしも、今は勤勉、實着などが代らんとする世の中に候。磊落と、勤勉、實着などを單に其自身の價值につきて比較せば無論前者の方は後へに墮落たるべきは自明の理に候。

◎さあれ又一面より見れば、こは甚だ悲しむべき現象に候はずや。現今の青年の活氣なきは一に斯の如き点に由來せるか、はた猫の如く、



鼠の如く、無活氣なる精神が終に生活問題の如きものを覺醒し來りたるかいづれなるかは知らざれども兎に角無活氣なるは爭はれざる事實に候。

内に燃ゆるが如き活氣なくては、自然彼等が世に處するの時に至りても公明正大なる行動に出でずして、因循姑息に傾くが普通の事實に候。故に收賄にさとき政治家、叩頭術に巧なる學者などは斯の如く生命なく活氣なき鼠輩の中より多く出づるものに候。

◎さはれ斯の如きは一般學生社會の風潮にして、前にも申たるが如く九州の粹をあつめしかも規則完備したる龍南の學團には夢更這般の消息あるべしと思はれず候。さるにかゝる駄法螺を吹くは不都合ならずやとの御叱言あるやも知れざれど、世俗にも倒れぬ先の杖とやら申し候へば、雜報子もいと鳥許なるわざなれ共、かくは繰言を申す次第に候。さりながら帝國ホテルや、國會議事堂の如き者は多くの杖を要せざる

由に候。されど此とても古くなれば杖を要する事は奈良の大佛にて御承知の程奉願候、無論犬小屋の如き茅屋は初より杖も必要この事に候。

◎オット無意義なる文字に貴重なる頁を費すは由來雜報子の方針にては候はざりき。毎年春陽の頃にもなれば、いどく面白からぬ風評の吾人の口端にのぼるが常にて、爲めに昨夏下宿條例が發布されし故にや、今年はやも蝶もすぎに戀の夢を忍ぶ頃となりしも今に所謂面白からぬ噂が人々の口の端にも何にもものぼらぬ由、雜報子等規則の偉大なる功力に向て讚美せざる可らば候。何はとまれ大慶至極此事と奉存候。◎さはれども若し諸兄にして道義心の欠乏するあらば、如何に功力大なる規則を以て之を束縛するも、うは糞に釘たるを免れず候。假令今日の禁酒條令若くは禁烟條令實施せらるゝとも若し學生にして道義心の欠乏するあらば學校生活の間のみ最も眞面目に、最も從順に規則に従ふども、卒業後は公然青樓に登るをも敢てするは

電氣燈を睹るよりも瞭なる事實に候。是れ一例に候へ共、斯の如きは現今の滔々たる社會の狀態に候間如何ともすへからず候。かくては折角偉大なる功力を備ふるとて吾人の讚美して止まる規則も一山三文たるを免れず候間雜報子の只頼む所は諸兄の胸の最底にひそめる或物に候。そも規則の如きは末の末のみかと存候。規則の末なるべきは確か校長の訓諭の中より聞き得し事と存候。雜報子不肖なれども尤なる事と存候。由來教育の如きものは決して片々たる規則を以て左右し得へからざるかと存候。要は生徒各自の道義心に有之候。され共なほなは此よりも必要なるべきは教育者其人の感化力如何に有之かと愚考仕候。

◎例を他に求むる迄もなく、當校に於ても其かみは韋軒先生の薰陶を受けし五百の健兒は能く、相一致して先生の教に従ひしとか、まことに其時代がしたはしく候。無論其時代には菓子喰ひながら未來の年俸を鼻うごめかしつゝ、互に

語り、或は寢室の一隅に葉唄をうなるやうの優男も無之かりし由、さもあるべき事と存候。

◎さはいへど元來感化とか何とか口では安く申せど實際には中々行はれ難き事かと存候。何となれば、ハートが出たる言にあらざれば到底人の肺肝に達し能はざるものにて、聲帶の振動によりて出たる言は單に他人の鼓膜に微動を與ふる以上の勢力なきものかと存候へばなり。而して實際惠深き萬知萬能神がさまよへる、あはれなる人の子を恵み玉ふが如き愛を以て學生に接するも難事に候へば、隨て所謂世の教育者連が止むを得ず規則を以て最後の策となすに至るには候はずや。斯の如きは、まことに歎すべき次第に候など、申せど所謂縁の下の力持ちにて、何を小癩な嘴の黄な癖にと、嘴に苦蒸せる人達は申すかは存玄候はねど、これも若いもの、常と御見のがしの程奉願候。

◎柄にも無き教育論をかつかぎ出して、諸兄の眼を汚したる段は何卒御海容被下度候。な

ほ云ひたき事は山なす程有之候へ共、四面八方  
楚歌の聲の其にはあらぬ蚊軍の凱歌に雜報子の  
如き膽小なるものは恐ろしくして、一先筆をね  
さめ候。敬具

法科生懇話會

五月十日の夜、渡邊大藏大臣の事業繰延論の可  
否に就て討論すとの廣告が出た。聞いて見ると、  
此討論會の議決次第で、日本の國是が定まる様  
な話であるから、自分も出掛けて見た。開會時刻  
を四十分と過ぎて、集まるものが僅に二十四人。  
嗚呼濟々たる法科生の在寮するものは、慥に五  
十人を起して居る。彼等口を開けば、直に國家を  
言ひ經綸を説く。それにはこんな大問題があるの  
に、半數の出席者もないとは情けないではない  
か。才子諸卿の奮起一番が願いたい。が然し、こ  
う出席者の少ないのも、少しは理由があるらし  
い。何にしても、ますこし、委員達に熟慮して貰  
つて、此會を今少し興味あらしめ、有益ならしめ

たいものだ。今の様では逆も、面白い結果とは云  
はれまい。イヤハヤ又いつもの慷慨熱を吹き立  
て、相濟まぬとをした。イザ報知に取掛るで御  
坐ろう。

先づ勝君が、出題者としての説明を、一通述べて  
討論に遷つた。第一消極席に現はれたのは誰あ  
ろ。數年以來、一超直入如來地の眞境に入り  
、學びの隙には、稱名觀念の床の上座禪圓月の  
窓の内、松吹く風に紫磨忍辱の心を練りつ、あ  
る、柑雲律師阿形君である。氏は説いて曰く、國  
家の富強は、交通事業に基するのを、一日でも延  
ばろうとするのは、大に不可であると説き、獨逸  
などの例を引いて之を證し、進んで大臣は財政  
欠乏の云ふが、之を補填するには、借金剩  
餘、公債償還費を以て、優に充たすことが出来  
る。計茲に出でずして、當局者自ら欠乏と叫ん  
で、遂に外國に於ける日本公債の下落を、起す  
に至らした。渡邊氏は國家の大不忠臣だ  
と、論結して降壇した。辨説は流暢の方である

が、論旨如何にも太袈裟で、これでは迎も、國  
 是が定まりそうにもなかつた。次に酒々たる風  
 采、積極席に現はれたのが、高橋君である、  
 此道にかけては、本校一二の驍將丈、論旨も  
 中々確かりとして、辨舌も餘程流麗であつた。  
 氏は説き起して曰く、財政と經濟とは並行すへ  
 きものであるのに、日清戰役後我國は財政のみ  
 に意を注ぎ、其一輪たる經濟に意を注がず、而  
 して戰争の結果過大なる軍備擴張となり、遂に  
 我經濟界の紊亂を惹起して、今日各地に頻々と  
 して起る、銀行破産の遠因となれりと論し、進  
 んで所謂繰延費の千万圓は、消極論者の説に依  
 れば、概ね固定資本の費途に充てらるゝものな  
 るが、如かす之を破産銀行に貸さんには、然ら  
 は不振の聲の喧き經濟界も、俄に活氣を帯び、  
 従て日本の財政も確定し、數年の後には民力も  
 充實するだろう。其時こそ公債募集も旨く行か  
 ふし、諸般事業の經營も完全に就さるゝであら  
 うと結び、最後に斷言して、人或は余の説を以

て、外人に弱を示すものとするかも知れぬと、  
 人は可成其弱点を示すべきものである。昔は冒  
 頓兵馬壯士を匿す、遂に平城の事あり。歴史は明  
 に、其弱点を示すは、眞の弱点でないを示して  
 居るではないかと叫んで降壇した。反對論者か  
 ら言はせると、随分穴の打所もあらが、要する  
 に條理が立つて、誰が聞いても、其論旨を了解  
 する様にかやつて、けた所が豪いよ次に律師が  
 再び現はれて、高橋君の説は小心であるとして、  
 一言二言之を駁し、どうしてもオレの方が善い  
 様だと云つて、降壇したのは、中々愛嬌があつ  
 た。次に同玄消極席に現はれたのが、新進の雄將  
 小野君である。少しは頼母敷思ふたが、然し余り  
 手ごたへもなかつた様だ。氏は先づ現今我國の  
 形勢に、着眼を着けて見よと叫び、戦後個人が大  
 に財政を紊せしめて、少しく資産が出来ると投  
 機に浮かざる、者が多いと慨し、又日本人のワ  
 イブスは、夫の脛コブリ許して、奢侈の風を増す  
 許だぞげなし、若し千萬圓を銀行に貸付けたら、

偶以て投機事業や、奢侈の風を増大するに過ぎないと論じ、苟も東洋經綸の大任を負へるものは、かくの如き姑息手段を取るべきでないといふ、ハイカラ的大言で結んだ。次に高橋君が出て、奢侈に就ての説は、至極同感だが、充分なる救済策がない内は、到底駄目だと論じた。次に消極席にノサリくとして、現はれたのは、朝から晩まで、取つて噛まふくとして、喚いて居る、肥前の住人飲雄居士村上君である、氏は先づ僕に名案ありと叫び、余は元來、鐵道國有には反對だが、然し既に國是となつた以上、充分遣らねばならぬ。それを今、中止するととなれば、折角今迄經營した費用は、寸功も見ずして、水泡に歸して仕舞ふ。又、勞働者も、突然事業を失ふから、之れ勞働者虐待であるといひ、又高橋君は紙幣を發行する餘地がないと云ふだが、然し之は兌換紙幣の語だ、宜しく不換紙幣を發行して、ドシく鐵道事業等を起し、人民も亦、ドシく汽車に乗り、ドシく、賃金を拂ふたなら、數

年の後、國庫夫れ余裕あらん、然る時に宜しく不換紙幣は、交換すれば善いではないかと、デシコツを、机に食はせながら喚いた。次に津末君が出て、自分は高橋君と、村上君との拆衷論者である。論旨の曖昧なる所があるから、諸君の寛大なるトコロを願ふと、只管あやまり、日本の財政は、未だ不換紙幣を發行する迄は、紊乱しては居ぬと説明し、然し又、鐵道事業はドシく、やらねばいけない、それに就き、第一必用なのは、鑛である、故に製鋼所の建設は、一日も早く就さねばならぬと云ふて降つた。次に勝君が出て、限あるの金を以て、限りなき事業は出来ぬから、今は大英斷を以て、官業を中止し、民業を起し、民力充實の策を採るべしと云ふて降壇した。最早辨士も出る風ではなし、ド、モ、折角の國是論も、有耶無耶の裡に、決着もなかつたが、さりとて又、斯程の大問題が、一夕の間に、まどまりますまいからと云ふ所で、これきりで閉會し、

茶菓が運ばれた。今晚の菓子には、存外善かつたので、之を傳へ聞いて、此次ぎこそは、屹度出席して呉れうと、力んで居る方々も多いそうだ。委員諸君此度は復、センベイのボスくするやつでも、食はせて遣り給へと云爾。

(ノンセンス生忘評多罪)

### 演說會概況

五月三十一日午後七時、撃拆を以て開會す。例によりて例の如く、聴者僅に十數名に過ぎず、辨士亦未だ出席せざるものあり、此に於てか間に合せ政策として林田委員登壇、數日前内務大臣より其結黨を禁せられたる社會民主黨に就き演ずる所あり。其要に曰く、我國現今の狀態として社會主義の勃興するは必然の勢ならむのみ、然れども余は社會民主黨の如く、徒に無知蒙昧の賤民を唆動して事を起すは其害毒の少なからざらむとを恐る。内務大臣の之に對する處置は、最も其順當なるを認むと論じ、更に進みて曰く、該黨

の發起者輩、或は此愚氏を糾合して以て大政黨を組織し、其野心を濟すの階梯となるにあらざるなきを知らむやと叫びて降壇せり。時に聽衆稍堂に滿つ。岸川君先づ演壇に上る。氏は國家即宗教論なる演題を掲げて、例の悠揚たる體度を以て論すらく、余が大体の眼目は耶蘇教を信するなかれと云ふにあり。夫れ眞理は絶對的のものにあらず、宗教の眞理も亦故らに之を作りしもの、み、何ぞ無限の崇拜を要せむやと論ぜ、進て曰く國家を隆盛ならしむる是れ吾人が窮極の目的なり。此目的に達せむか爲には詐欺或は之を行はむ、惡言或は之を放たむ、要は其の目的を達するにあるのみ。吾人の所謂宗教とはこれにして、其方法こそ即ち眞理なりと論じ、最後に案を叩きて曰く、耶教信者は意氣揚々としてバイブルを携へて教會へ上り、天に在ます我等の神よと喚く代りに、何ぞ我が天皇陛下と言はざると。論する處時に大旨を穿つものなきにあらざれど、要するに徒に奇矯に逸し、加ふるに粗獷

散漫、意味の透徹せずして胡魔化せし節もありし如きは、大に不可なり。遮莫君は、慥に三部生に似合はざる趣味を有するの士、勉めて止まずんば造詣する所少からざる好漢幸に健在なれば、次に倫理問題と宗教ある演題を掲げて現はれしは、人々の常ねに秀麗歌人となしゆる柳川君なり。氏は先づ説き起して曰く、現今は實に思想不統一の時代なり。黄金は到る處に崇拜せられ、道義は到る處に蔑視せらる。此弊を矯めむには、勢倫理問題を解決せざるべからず、然かも人生最後の目的に達するには、倫理標準は余りに漠然として索むべからず、故に宗教に依らざるべからずと論じ、進むで幾多の事例を擧げて宗教の徳を頌し、最後に曰く、余は佛耶兩教其之を信せず、之れ其ドクトリン其者には間然する所なしと雖、大に其傳道法の誤れるを以てなり、故に如何もにして新宗教の完全なるを設立せざる可らず、是即ち吾人の責任なりと論して降壇されたり。論する所や大に善し、然かも吾人の一言以て君に問ふべきは、君の体度にあり。高

橋君の所謂、是が西洋紳士の風なりとすれば、遷して以て巴里の都中に、君の体度を現さば庶幾くば紳士淑女をして、渴仰の涙夫れ萬斛らなしめむ。しかも、我校に於ては、此るグニヤ／＼たる體度は、大に聴者の感興を害するが如し、天成の体度に對して此注文をなす、或は無理ならんも、宜しく注意せらるゝ處ありて可ならむ。次に檜谷君は、吾人の職責なる演題を掲げて起てり。其説に曰く、我國維新の一段落は吾人の父祖之を濟せり、進みて其第二段落を遂行すべきは吾人の双肩に懸かれり、第二段落とは何ぞや、東洋經略是なりと論じ、進みて其經略法に及びて、分割と保全の二に歸するを説き、而して余は保全論を取るものなりとて、彼の日清戦争は例令止むを得ずして起れるものなりと雖、之に因て大に西方東浸の氣運を早めたるに相違なければ、我國たるもの又、其尻拭をなすべき義務あり、且又我國は古來支那より文明發展上大いなる助力を被むれり、此の恩義ある國に對して

は、充分之に報するの義務ありと論して降壇されたり。高橋君が東洋豪傑の風采ありしと稱せし如く、其の登壇するや、椅子引き寄せて儼然として之に坐し、満々たるユツプを飲又一飲、徐ろに其猫髻を捻りて、満場を一睨する所、ソレハ凄まじき勢なりし。天柱摧け地雄裂けざりしはモツケの幸と云ふべし。其論旨大に肯緊に當るものありしと雖、如何なる妖魔の見入りしにや、此豪傑も腰の邊がグラ／＼して、言語殆ど呂律を辨せざりし節ありしは惜むべし、次に水口君は社會問題の解決なる演題を提て登壇せり、氏は説きて曰く、現今は所謂作業革命の世なり、斯る時代には往々暴戾なる富豪者を生じ、勞働を生じ、勞働者は非常なる抑壓を受くるとあり、此に於てか社會問題は勃起すと論じ、進みて我農業界は土地兼併到る處に行はれ、地主は減少して小作人非常に増加しつゝあり、又工業界に於ても其駸々たる進歩は誠に慶すべしと雖、其裏面には恐るべき現象の潜むありて

存す、之何ぞや曰く其賃金の低廉なるとなり、と説き、夫れ歐洲の如き、勞働賃高きにも拘はらず、猶社會問題は騰天の勢力を醸成しつゝあり、況むや我國の如きに於てをや、此問題の早晩勃起すべきは瞭然たり、社會民主黨は即此氣運に鞭たむとしたるもののみ。余も其主義には賛成せざれども、當局者たるものは宜しく、其の氣運の暗流が脈々として、遍く發生しつゝあるの事實に注意せざるべからず、若し今にして之を匡正せずむは、或は恐る他日の嚙臍の悔あらむとを。此を以て余は租税法の改正、勞働者保護信用組合の三策を以て、應急の政策として敢てこれを當局者に獻せしむとて、一々其理由を述べて降壇せられたり、博引旁證、其言を立つるや一も苟もせず、君の如きは最も忠實なる辯士と稱すべし、加ふるに音吐は誠に震ヒツク如き美聲にして、朗々透徹金石を鳴らすが如し。一言強ひて之に望まば、多少の抑揚を加られむことなり然ずんば折角の美音も平板に陥りて、糟糠



を囓むの思をなさしむる事あらむ。次に本壇の饒將高橋君は現れたり。君は善惡の鬭争なる演題を掲げて曰く、拜火教は現時の倫理問題を解決するに、大に恰當する者あり、蓋し世界は其の所謂善惡二神の鬭争に外ならずと論じ、而して善惡の鬭争に於ける其輸贏を歴史に徴するに、惡の方常に幾分の勝を占むるが如しと説き、竿頭壹歩を進めて曰く、何故に斯る現象を生ずるかと云ふに、唯其れ惡人は能く一致するによるのみ、彼等を一致せしむるには、唯だ利を以てせば足れりと雖、善人を一致せしむるものは意見なり。然かも等しく是善人なるも、自ら其意見には經庭あり、而して各自固く之を執て動かさるを以て、其一致するや甚だ難し、これ古來常に倭姦の跋扈する所以なりと論じ、然らば、善人を一致せしむるには、如何の手段を採るべきやとするに、余は即ち次の如く云はむとす、曰く善人一致の爲には、自身の意見を犠牲に供するの覺悟あらざるべからず、然かして若し新

意見にして確立せられなば、各人皆我なる精神を捨て、其新意見の下に一致して行動せざるべからずと説き、進みて現今偶々善人なきにあらざれど皆此の雅量を缺き、爲めに泰山の功を一簣に壞ることあり、之畢竟小我を曉りて、未だ大我を曉らざるものありと慨して降壇されたり。論旨者整然として絲毫も紊れず、加ふるに、行辯流暢にして滑脱、大に傾聽の價值ありたり。好辨士幸に自重せよ。次に將さに起らんとする新工學なる演題を掲げて、いつに替はらぬ溫容を以て現はれ給ひしは友田教授なり。先づ説き起して曰く、現今文明の原動力は石炭なり（物質的文明上より見て）、其の消費法の善惡は大に文明の強弱に影響す而して其の方法をして、益良好ならしめむと欲せば、竈の改良も必要ならむが、最も緊要なるは運搬法の改良なり、而して世人は稍もすれば、其運搬法は必ず汽車に依らざるべからざる如く思惟するものあれど、余は悉皆之を其產地なる竈中に燃焼して、以

て得たる原動力を、針金にて送れば可なりと云ふものなりと論じ、更に進みて、然れども我國の如きは其產出の石炭は悉皆之を外國に賣却すべし、如何となれば我國には水力なる石炭以外に天然が賦與したる原動力あり、之を利用して電氣を起さば莫大の事業を起すに足るとて、東西の事例を擧げて一々之を證明し、而して之が送附に要する電線は非常に高價なれば、最も研究すべきは、可成小線を用ひて而して可成度の説き電氣を送るにありと説き、然かりと雖、其の線を小あらしめむとする如きは、五十歩百歩の論のみ、此に於てか、無線電線の必要起るとて、之が原理、由來等を一々説述して降壇されたり。稍もすれば乾燥無味に陥り易き科學を吾人が常に愉快に聞くを得るは、偏に、先生の流麗にして然かも切々として肯綮の中に、滑脱なる辨説の賜なり、多謝々々。時已でに時辰器十一時半を報ず。即閉會を告げて茶話會に移り、各自十二分の歡を盡して散會したる。

## 在寮法科生懇話會

八十一

本學年最終の懇話會は六月三日午後八時から瑞邦館で開かれた、此度のは十分間演説と云ふ新趣向で、三時間足らずの間に演壇に立つた者が十八名、短きは五分より長きも十二分間に國家社會の大勢やら道德界自然界の現象を走馬燈の様にチロリ々々と論ずる始末で、一人に付き二回つゝ叩く拍手の響ばかりでも随分當夜の景氣を添へた而かも花瓶に紅花青柳と來ては常にない優美テールブルの飾様。最、先きに登壇したのが木下君、日本の明治主義と云ふ題の下に我が國がモンロー主義に倣ふて東洋の保護を以て國是とし之を達するに人道の大勢力を利用すべきを説く誠實の辨唯た惜しむらくは身体位置の變換が餘り甚し過ぎた様であつた。次は別府君の「偶感」、ゴゴ聲張り揚げて現社會の狀態を痛憤したの、はよかつが手足の活動が醉狂に類して居たのは聴者の拍手を迎へたと同時に又た其の笑を招いた。次が小野君の「歴史觀」、歴史の指導

によりて吾人の前途を推測經營すべし」と云ふ主意で、熱誠の氣概は充分面に溢れて居たけれども餘り多く「何何ではないか」斯斯ではなかつたか」を連發したのは、エム・フサイズするためではあつたらふが聴者の感をひくことは却つて少かつた。次に佐藤君の『今日』は英國が現今未開國に對する非道の態度より説き起し、今日六月三日は半世紀の昔ペリリが浦賀に入り來りたる其の當日であると云ふ、人の意表に出づる論、言葉がはつきりせず又活氣の足らなかつたのは惜しかつた。野村君の『墮落社會』は美名の下に私慾を逞くする現社會を責めて快なりであつたが、立往生に終つたのは拍手が高過ぎでもした爲か。永山君は社會が複雑なるにつれ、頭腦は益々密に又クリヤーでなくてはならぬ、頭をクリヤーにするにはロー、オプ、チーチエアを研究し發見すべしと云ふ意味でやつた、オイドンなどの國音は少し注意されては如何、而して吾人は更に君に向つて今一層確乎たる態

度と、活氣なる語調とを希望せざるを得ない。『空想』は青木利光君に依て論ぜられたが、空想は矢張り空想の様で不肖よく聴き留むる事か出来なかつた。次に出たのは知名の松村和尚様何か説教でもなさるのかと耳傾けて居たが、幽靈の、鬼の、腕かぢりの、脛かぢりので終つたには少く閉口仕つた。藤堂君は我が『校風』の變遷を論して其内部が原因を師の感化力足らざる事、生徒相互相親しむ時日が短かき事、生徒の種々の地方から集り來るために校風統一の困難な事、及以前に比して生徒の數の増したる事の四に歸した、と云ふ矢張りレクチエアの氣味が感ぜられたのは非か。林田君が『正義と詭略』と云ふ題で競争に勝を制せんが爲めに卑劣漢が詭客を濫用するを慨嘆し、先づ前半辯士中の白眉として壇を降りてから暫時休息、茶菓の饗があつた。拍手の音に頭を擧ると阿形禪師が已に『天地我父母萬物我師論』に取りかゝつて居る。松野君の『世界のアクター』も無事相済み、村上君が『道德

上から論じて、藝妓は全廢せねばならぬ、風俗上からしても、衛生上から見ても、……法律上から見れば猶更である、もし彼等の存在を許すとしたら、我が法律は全く矛盾の法律である」と例のタイガー十ライオン十デビルの猛勢で『藩妓全廢論をやつて除けた其の勢の凄じさ、テ、ブルの上の花瓶が落ちたせぬかどハッハ思はれる位。』志波原君の『情の活動が終つて、雄將勝君の『人類の一員としての吾人の義務』、『人類全体の安寧幸福を保ち又た増進するは吾人の義務で、野心の爲に事業を爲すは大間違、千古の名聲は事業に伴ふ自然の報酬と思はねばならぬ』と云ふ主意で、此壇の雄將丈議論も明白で、態度も落着いたものだ、唯だ憾むらくは總じて雄大の点に缺けて居た、十分間の短演説に之を望むは無理かも知れないが、『所謂熊本の美風を難す』といふ題で熊本學生が師に對して餘り服従し過ぐるを難したのには知名の驍將高橋君、是には誤解も稍あつたらしい、特に彼等學生の理

を理として堂堂師に向つて論を挑まないのは何か小名譽でも得やう御氣に入らうとの下心から起るもの、様に論したのは彼等に取りては迷惑至極の事であらう。君のも聴衆を壓する底の雄姿は未だ遙かにやわい。だがさすが驍將、辨の練れて居るのは感服の外ない。三部の名士岸川君はやれら身を起し、來賓として演壇に登つた、説く所は「諸君が抱く大抱負をどうか現實化してもらいたい、吾輩冷飯株に後引受けを盡す様な舉動をなさるな、事業を爲すには時代思想に乗る計りでなく、自ら進んで輿論を喚起し時代の思想を導かねばならぬ」と云ふ様な吾人に對する忠告で、例の滑稽が少なかつたのは餘程よかつた、君が壇を降る時ダンケの聲も聞けた。最後に吉田清志君は智徳の行はるべき時と場所を論する積りであつたが時と場所との都合かわるゝといつて深く論せずには壇を降りた。終りて茶話會名指しに叩きつわめきつの大賑合で散會したのは十一時過であつた。(妄評)

多罪

## 學寮茶話會兼卒業生豫餞會

三年生諸君は今一ヶ月半を出でずして將に我が校を去らんとするのである、三年の間日夜孜孜として學と識と抱負との畜積に餘念なく、寮内に在りては後進の誘導者として寮風の發揚者として熱心に力を盡されたる諸君は、今や春の海よりも洋々たる希望を抱いて進んで大學に入らんとするのである、吾人一二年生たるもの豈に其の前途を祝し併せて送別の意を盡さざるを得んや、五月十七日午後七時半から瑞邦館で本學期學寮茶話會を兼ね盛大なる豫餞會が行はれた。

館内は縦横に張られたる三角旗と、二十餘個の提灯、四壁に貼り回らしたる送別の詩歌とによりて飾られ、渡邊教頭、杉山教授、奥舍監を始め、生徒課の諸先生が居流れて居らるゝ。拍手に迎へられて。先づ正面の演壇に顯はれたのは

學寮副會長上田徹君で、麗會の辭に充いて大要左の如き演説をやつた。

本校風氣の源泉たる我が習學寮は、家族的團結を目的として各種の運動部を設け、此の目的の遂行を計つた、是れ實に我が喜ぶ所である、けれども吾人は猶ほ進んで團結の實を舉げねばならない。校風を發揚するには寮風を揚げねばならぬ、而して寮風を揚ぐるには愉快なる和親團結によらねばならないのである。

諸君！諸君は故郷を去て遠く本校に來れるものである。若し諸君の間に團結なく和親がなかつたならばどうして我が校風を發揚することが出來やうか。況んや諸君は將に來る九月に新入生諸氏を迎へんとするもの、和親睦致の實を舉ぐるは實に此の時である。願くは諸君盛に各運動部を活用して其目的を貫かんとを務めよ。

次に法科二年片山秀太郎君は一二年生一同に代

りて三年に對する挨拶を述べた。

校風開發者として、又後進誘導者として、大に力を盡されたる諸子は、今や會者常離の數に洩れずして本校を去らんとし、吾人は其後任者たるの位地に立たんとしつつある。吾人不才其任に堪へざらんことを恐るゝのであるが、猶ほ一片元氣の内に存するありて、願くは心を安んぜられよと云ふのである、健在なれ諸子！邦家の爲め又た自らのために、次に登壇したるは法科三年村上伸雄君先づ片山君の挨拶に對して答辨を述べ、

吾人寢食苦樂を共にすること三年、別れんとするに際して豈に辭なきを得んやとて、滿堂を壓する様な威勢で大要左の様な演説を述べた。予は我が寮を愛する者である、過去も、現在も、又未來も。予等は予等の先輩から龍南の風紀を譲り受けて、之を保持すべき任を背負つて居た者である。先輩の云ふ所を聞けば、秋月章軒先生當時の生徒の意氣の活潑で質朴なるこ

## 八十四

と、禮儀を重んず、親睦を旨として交誼の厚いことは兄弟も只ならなかつたこと今から思うと懷しさに堪わぬ。龍南の美風は實に此時に發輝せられたのである。

爾來地方的割據や部的離隔の爲に意氣は漸々沈衰し。之を七八年前の當時に較ぶれば實に顔色無しと云ふ様で、韋軒先生の肖像に對して誠に面目ない次第、是れ常に予等の念頭を去らないものである。そこで予等は寮風振勵の必要を感じて盛は運動部を振興し、禮儀を重んじ親睦を旨として韋軒先生當時の美風に打ち返さうと互に力を盡した、勿論多少の成功は有たが、嘆すべし！功少くして失望多しで、曾て韋軒先生の監督の下には些の法律的束縛を受けなかつた龍南の天地は、爾來法律的の制裁益々繁雜になつて、今や來學年新入生に對しては禁酒の誓をさせやうとする勢、ア、教育界は斯くまでも變遷したのか、ア、教育者は斯く迄も無能になつたのか。

予等は落膽するも猶ほ寮を愛し望を諸君に囑する者である、然るに我が寮内徹夜して試験の順備を爲す者はあるも、力を風紀の維持作興に盡す者少しと云ふに至ては、これ何たる事態ぞ。願くは諸君、我が寮生をして意氣活潑禮儀を重んじ親睦を旨として一致共同を計ること、韋軒先生當時の如くならしめよ。諸君は予等を送ると同時に將た新入生諸子を迎へんとするのである、願くば益々奮勵して力を校風の点に注げ地方的、或は個人的私忿の爲に全寮の圓滿を欠く様なことを爲さず、教育界の惡潮に流さるゝことなく、自ら制裁し、自ら教育し、自己の徳なくんば教育社會の制裁も全く無用に歸することをよく悟つて、うして他の高等學校に比して敢て遜色なしと云ふに至らしめんことを務めよ。

予等が諸君に望む所は此の如く大なるものである。予等は將に寮を去らんとす、更に進んで學理を研究せんとするも、此時天下の爲に起

つて素志を貫徹せんとするも此の時で、予等も大に務めやう、諸君も大に奮勵せよ。

例の『取つてかまう』の猛勢をば、茲に眞面目に注ぎ出したので、態度も語調も宛ら大風の茂林を動かすが如しと云ふ具合で、拍手喝采の中に壇を降りた。

次に顯れたのが渡邊教頭、額に笑を浮べ金縁眼鏡を指先きでつくじり乍ら説き出されたのは、

諸君、特に三年生諸君、諸君等は波風荒き學海を越ねねばならない者である、そこで予は今本校に於ける入學生と卒業生との比較、及び本校卒業生と本校出身大學卒業生との割合を示して、諸君が棹のさし加減を注意し置かうと思ふ。

本校入學年度

卒業生百分比例

廿七年

六〇(ペルセント)

廿八年

五〇

廿九年

四六

三十年

四三

平均

本校卒業年度

大學卒業百分比例

五〇

廿七年

四〇

廿八年

四五

廿九年

四九

三十年

三〇

平均

四〇

それで本校で四の力で勉強したものは大學では五の力を費さねばならぬ、これは本校卒業生丈の計算だから、此の外に全國六高等學校卒業生との競争や、外界の事情や、大學に入つたといふ觀念や、更に學界の波瀾を荒らくするものを加へたらば、五では足りない、六位の力は費す覺悟で居ねばならぬ。

こゝは各部通じて平均を取つたのだが、別に法工兩科を比較して見ると、高等學校と大學との現象全く轉倒して居る。

本校卒業生の入

全大學を卒業せる

校生に對する比例

もの

八十六

工科 三六 ベルセント 七〇 ベルセント

法科 五四 一九

但廿七年より三十年まで四年間平均それで法科生は特に今よりは三倍の力を奮つて大學の波浪を乗り越す覺悟でなくてはならない、又工科生に一言すべきは、以上の計算は大學で競争試験がまだ無かつた時ののであるから、今後は猶は一層の勉強を要すると云ふことである。

次に谷口君の送別歌朗吟、其の朗々たる音聲、妙を極めた詞子は心澄むばかりであつたが、一度も二度も讀み違へたのは可笑しかつた。それから戸張先生の劍舞、武術の奧義を盡しての劍舞で、技術の巧妙自在は云はすもがなだが、熱誠が全身に満ち、て居たのは特に吾人の感を深からしめたのだ。落語があるやら、狂言があるやら、菓子や、ラム子の馳走に、イヤハヤ應接に暇なしと、云へば一時迄も二時迄も歡を盡して賑合つて居た、らうと思はれやうが、同玄様なるこ



とを繰り返す狂言には早や飽き果て候。いざ罷り歸らうと存する」と云ふ調子で、十一時頃は半ば寢室に罷り上つた様であつた。

### ○弓術部春季大會

『青嵐や的いろく』の競射會』うるはしかつた櫻も桃も、已に梢を辞し去つて、野も山も今は一面に綠をもつて蔽はれて居る。さりとて春は全くと過ぎ去つたのではない、紫の藤の花が、所々にゆかりの色に咲き匂うて居る。正に是、寒暖當を得て人心最も爽快なる時である。

四月廿八日！。百餘の健兒を含める我龍南の弓術部わ、此日を以て春季大會を開いたのである。前日來の天氣が、我等を氣づかはせたこと一通りではなかつたが、意氣軒昂鏃を磨て日の來るのを、指をり敷へて待つてをる健兒のをくしさを、天も感じたのであらう、此日は實に日本晴の好天氣で空には一点の雲もなく、輕風面をかすめて神氣爽快、頻りに腕の鳴るを覺ゆるもの

である。

午前九時半、先づ遠的から始めた、所は綠色濃き武士の原(練兵場)である、方五尺二寸の大的は朝露きらめく若草の上に、ちららかなる日光をあびて高く懸かゝりてをる、來り會せる二十餘人の面々を、二組に分ち、各六本つゝ三立順次に射ることゝした。的が例よりも大きかつた爲でもたらうか、平常練磨の功實に恐ろしいもので、當るも當るゝ當りの聲は弦聲に應じて絶え間なかつた。實に總數八十に上つた。之を去年に比すれば三倍以上である、部員技術の進歩は、是を以ても推知せらるゝのである。十二時頃漸く此的はすんだ、當の數を記せば次の様だ、

- 七本 稻川、北里、村上、
- 六本 柴山、山元、永山、
- 五本 緒方、島野、山口
- 四本 板井、野村、澤、岡本、
- 三本、鴻巢、二階堂、

## 二本 園、矢野、

一本 横田、三田、黒川、

次に扇的に移つた、黒地を染めぬいだあざやかな紅の色が、日光に映する様、何とも例へがない程うるなしい。之を射とめて屋島の浦ならぬとも「那須の與一の名譽をつぐべき、者はそも誰てあらうか。代矢の順によつて第一番に立つた矢野氏、茅渚の浦で鍛ひ上げた腕では、オールどる業ばかりが、弓矢取つても我校有數の腕き、男、びようと切つて放つ矢は日の丸の真中と思はれたが、少しく上がつて掠めさつたは残念であつた。次に立つたる佐田氏、横田氏、鴻巣氏孰れも弓矢取つては一かどの曲者であるが、惜しいと思はる、矢も出なかつた。第拾壹番目に立つたのは誰あう、劍取つては龍南の天地敵なしと云はる、澤氏！、弓矢の道も亦鍛錬すること深く、斯道の重鎮を以て推さる、人である。我ころは那須の與一が功名を繼ぎくれんものと朱塗の弓にきりふの矢番ひ満月の如く引絞つて放つ

## 八十八

たが、狙過たず日の丸よ参て少しく後を發矢と射貫いた。此御手並には皆舌を卷いて感服した。是からは職員射場に陣をうつして、金的の競射を始めた、時正に二時である一寸の金的の、眞黒い安土の中に、きら／＼と輝いてをる様は、物すごき深潭の内に頭をあげた龍の眼と例へうか、乃至は、眞暗らな宵に密雲の間を洩るゝ明星とても言はうが、兎に角之を射ぬかうと言はうは、一樣二様の腕では出來ぬことである。代矢はふられた、一番に出たのは豊後の國竹田の往人黒川の健士、花々しき若武者である。昨年一度、金的を射ぬいてより、其名同人の間に讃々たるものである。然り遂に此度は功を奏しなかつた。次に立つたのは、やはり竹田の住人三田の善喜、温厚なる老士である、矢は随分近く行つたが其功はなかつた。次は熊本に住人村上の爲夫、其熱心と才氣とは、大に近來技倆を上めた血氣の若武者であるから、人々如何にと見つめて居つたが、少し下かつて、的に餘塵を

打かけたのは惜しいことであつた。次は北里、横田の面々名にしれふ射手であるが遂に其功を奏しなかつた。かくて總人數二十有六人悉く早矢を射つくし、乙矢を射盡しけれども、更に當てる者が無い、遂に二立目の乙矢となつた、十七番目に立つたのわ、臼杵の住人稻川の牛五郎年來寒暑に鍛うた腕は鐵の如く、其黎黑なる顔は、一見して如何に其枝に忠なる者であるかと云ふとは推し量らるのである、竊に人々の附甲斐ないのを憤つてをつたが、遂に狙定めて放つた矢は、的の眞中を貫いた、拍手の聲一時は耳も聾せんばかりであつて、……今年しや丑の年あたり年……と誰やら言ふたものがある……」。是から八寸的の分附競射となつた、束を得て喜ぶもの、土東して響するもの、笑ふもの歎するもの、中々面白い有様であつたが、五立を射盡して總計六分、柴山と山元、五分は富田、大槻の二來賓、三分は野村、園、佐田、二階堂、黒川、岡本、二分北里、山口、永山と定まり、競争で一等山元、二等柴山、三

等大概四等富田、五等園、六等佐田、七等三階堂、八等黒川、九等野村、十等岡本、十一等山口、十二等永山、十三等北里と決した。

やがて是もすんで、今度は餘興として總勢を三分して競射を行ひ、勝組は菓子を得、負組は射場はいと定めた。其結果は上組三点、中組八點、下組一點で中組の勝下組の負ときまつた。負組の老少打まじりての射場這ひは、例によりて人をして頤をどかしめたが、中にも不破部長か徒跣になつて、眞面目に這はれたのは大喝采であつた。是で全く今日の會は終つて、例の如く拍手の中に賞品を渡した。殊に遠的賞品の極めて滑稽であつたのは大喝采を博したが。中にも來賓なる舊敎授園先生が、丸髻の形をわられたのはをかしかつた、其他人形、風船球など色々のものがでた。

全く終つて散會したのは六時頃であつた。日は漸く西に傾いて、薄い夕靄があたりを閉し始めた。勝つたもの、負たもの、いづれも弓矢を肩

にして喜ばしげに飯路を急いでわかれ去つた。  
平和のつどひよ、親しき團體よ、吾人は我等個人の間、些の隔執を見あいのである、誠に純白なるまどぬである、天も空めて我等に幸を與ふることであらう！

終りに臨んで吾人は今日の好成績を思うて轉欽喜に堪へないものである。富田、大槻其他の來賓諸氏の如きは、實に當地弓術界の大家であるのに、吾人は彼の人々を相手にして、一步も後れを取らなかつたのは、實にすばらしいものである、部員諸君、願くは此形勢を永遠に持續せられんこと、實に吾人の希望に堪へないことである。

賢明なる舊委員職を去つて、吾人は其務をついだ、愚鈍なる器其職にたへないことを知つて居るが、今更致し方もないのである。願くは部員諸君よ、吾人の愚を咎めらるゝことなく、何事も輔佐翼賛せられ、益我弓術部の盛大をはかられんことを、實に吾人委員が叩頭

## 九十

して希望に堪へないことである。(委員投)

## ○弓術部射納式概況

桃櫻は更にも言はず、牡丹芍藥など、花てふ花はことごとく散りはてゝ、世界はまづたく茂る青葉に蔽はれし四月の末(廿五日)我弓術部わ、首尾よく三年の學びをへて、東の方に上りゆきます友どちの、はなむけを兼ねて午後一時半、先づ三年級の柴山、思、山口の三たりわ、式の始として駄配をあしぬ。柴山氏の三本とも續けて星を射られしに、四本目を落されたるわいと口惜しきことなりき。

是もすみて方四寸板の射割をはじめぬ。初立の早矢に、東師範、野村、島野教授の三人首尾よく射とめて、功名の花を滿梁に散らし、次で乙矢にて鴻巣氏も亦的の真中を射割りたれば、居ならふ人々、かくては日頃の腕前をあらはさん折なしと悔みあいしが、初立を射盡し、二立目の早矢も空しく射終はりぬ、中にも隨分危き矢も

多く、或は的を横さまにたゞき落し、或は支へし竹を打折りなどして、屢々人々をして膽をひやさしめたり。乙矢となりても中々當るべくも見ゆるが、十一番目に立ちたる澤氏によりて、遂に射割られぬ。

是より七寸的の分附にうつる。例の如く笑のうちには五立を射終る、其結果は竹中氏初立に土東せしも、三立目に東をぬて五分となり、永山氏は始めより片矢にて五分を得、生駒師範亦最初より片矢を入れ給ひしが、最後の東にて六分となりぬ。其他三分は嶋野助教授、山元、東師範、矢野、黒川、二分は上野先生、山口、野村、柴山、村上と定まり、競争にて壹等生駒師範、二等竹中、三等永山、四等東師範、五等矢野、六等山元、七等島野助教授、八等黒川、九等山口、十等村上、十一等野村、十二等柴山、十三等上野先生と決したり。是もすみたれば例によりて、全人數を三分して競射を行ふ、其結果は上組二點、中組下組共に五點となり、上組は例の射場這ひをなしぬ。猶

時早しとて又一回行ひしに、此度わ上組三點中組一點下組二點にて遂に中組の負となりたり。時にはや五時半にもなりたれば、是にて此日の式を閉ちて散會す。

今日は先日の春季大會の折にもまして、いどよき天氣なりき。龍田の山の頂よりさど吹き落す青嵐は、あたりの松に響をなして、其音切々、さながら別の曲にてもかなづらんごとくなりき。あはれ茲に學びの業し終へて此校を去り給ふ友ぞちよ、我部をまだ赤兒の時代より起して、今日の隆盛に至らしめたる君等の恵は夢にも忘れじ、君等も亦此道を深く極め給ひて、又折々は我等に助言を與へられんことを伏して乞ふものなり。

(委員授)

### 學生連合擊劍大演武會記事

五月十八日午前九時々當校卒業生諸氏の豫餞を兼ね市内諸學校生徒は勿論八代中學校生徒等をも招待して茲に當部は連合擊劍大會を舉行したり

九十二

[illegible]

洞面

中鳥井健次  
高田上嘉藏

面小手

濟岐部正之  
高中島三太

小手

中西  
工業堤貞記

面

八代中菱田權六

面小手

工業永田左門

工業安富多喜雄

面洞

八代中藁井美喜代麻

小手々々

中高濱逸機  
高菰田成亮

洞

濟内田友義

高小中恒行

洞分

中高野已太郎

高松本虎太

面小手

中渡邊藤一郎  
高外間現篤

面同

蒼細川孝友  
高田所喜久馬

小手同

濟池田直彦  
高竹永一時

洞面

中柏田一道  
高鳥越盤

面

蒼有吉薰夫  
高緒方清

面同

濟古閑龜喜

小手洞

中大淵朴

小手

高竹中一時

小手同

師赤城安熊  
高續有節

面 濟河瀬六郎  
面 高片山量平  
面 小手

面 小手分  
面 中光永一男  
面 高藤本一

面 小手同  
面 中高田孝一  
面 高山室宗文

面 小手同  
面 中山本誠夫  
面 高田所喜久馬

面 面分  
面 八代中蓑田權六  
面 高緒方清

面 小手同  
面 濟鹽見勉  
面 高林進士

面 面同  
面 中有働信義  
面 高山口常吉

面 面同  
面 濟河瀬常記  
面 高山山令之

面 小手  
面 中高野真雄  
面 高植賀龍雄

面 面々  
面 中指田勝之  
面 高上村達人

面 面小手  
面 濟清成隼人  
面 高澤村榮美

面 面  
面 師山隈一眞  
面 高竹中釧三

面 面同  
面 師中島正勝  
面 高田中初太郎

面 面同  
面 中平井三男  
面 高林進士

面 〇  
面 中南條兼次郎  
面 高淵野幾平

面 面々  
面 濟秋山音成  
面 高石井克太郎



小手同	濟江藤朴
高魚住惇吉	
面	
小手同	師佐々恒喜
高宮本清平	
中増岡直人	
高荻野切磨	
洞同	
小手	師本郷辰藏
面胴	高村田俊彦
○	中彭城哲夫
○	高川井田藤助
○	濟牧九郎
○	高空閑茂
○	濟高野鉄太郎
○	高有田秀介
○	八代中瀧本潔
面同	高川井田藤助

面洞

師有働 賀三  
高萩野 切磨

分

濟山本 卯八  
高厨 豐

小手洞

中相良 於兔  
藁井美喜代麻

小手面

師野田 松平  
高池田 隆德

洞

小手面

濟坂口 鎮雄  
高森 蔭利

面

小手

八代中 白石 巖

洞同

高松尾 荒吉

洞少手

師松本 榮太  
中野田 楯雄

少手洞

師吉村 一惠  
高入木虎之助

面小手

師野田 又雄  
高澤 友彦

洞小手

濟平山 勝衛  
高上田 徹

小手同

小手

師鍋島 卯藏  
高行德 俊則

面分

面

師阿部 七藏  
高松山 重喜

小手

面

濟少早川 敏雄  
高行德 俊則

面同

八代中 白石 巖  
中古賀 榮信

備考

高

高等學 校

師

師範學 校

濟

中學 校

中

熊本中學 校

八代中 八代中 八代中  
蒼蒼蒼 業業業  
工工工 學學學  
高小 小 校校校  
紅白勝負試合

2 中彭城 哲夫	高武田 管雄 1
2 濟長坂 丈雄	同村田 俊彦 3
中増岡 直人	同萩野 切磨 4
6 師野田 松平	同川井田 藤助 1
5 師吉村 一惠	同有田 秀介 1
4 師阿部 七藏	同空閑 茂 6
3 師野田 又雄	同森 蔭利
3 濟坂口 鎮雄	同池田 隆德 3
2 濟小早川 敏雄	同上田 徹 2
4 師松本 榮太	同行德 俊則 1
2 中野田 楯雄	同松山 重喜 2
1 師鍋島 卯藏	同澤 友彦 5
5 八代中白石 巖	同松尾 荒吉
1 中古賀 榮信	同八木虎之助 3

分

勝數

貳拾八本

試合成績表

勝數

參拾貳本

人員	勝數	分數	負數
高等學校	六七	二六	八 三三
師範學校	一六	五	二 九
濟濟翼	貳四	一七	一 六
熊本中學	二三	一一	三 九
八代中學校	九	三	一 五
工業學校	三	二	〇 一
蒼莨學舍	四	一	〇 三
小學校	二	一	一

右にて今日之演武は全く終りしかば會田部長は勝者に夫れ夫れ賞品を與へられ續きて一同に今日の盛會を謝せられ尙は將來も斯道の益々隆盛ならん事を希望するの旨を述べられたり之より演武者は同相集り茶話會を開き敵も味方も互に胸襟を開きて笑談す斯くて全く散し盡せしは午後六時なりき (委員授)

野村	中光	榎木野	木下	濟德永	濟竹下	講鈴木	佐藤	森崎	江崎	竹田	慳谷	濱田	福富	萩尾	本山	大西	久木山	草野
林	講仁保	講入江		講入江	○ ○	○ ○	丸田	○ ○	前原		講眞鍋	濟池邊	濟田代	濟福田	講松田	濟村松	濟今村	津江

神皇正統記

や猫の様だと言はれては濟まぬ、ドウしても今少し活氣を付けるのが今日吾々乃至は教育社會の急務ぢや、一体青年の時期は發達の最中であるから勢力が全身に充滿して居る、それで善い方にも悪い方にも走り過ぎる、從つて粗暴に走る事もある、若し學生がれどなくして、行儀よく、人の言ふ事を皆よく聞くといふ様な事があつたら、其時こそは書生の元氣全く墜落して仕舞た時である、人物のよい君子達中の社會に、競争無く、進歩無く、一步は一步より退くより外は無い、上は大臣より下は巡查教員に至るまで悉く君子である帝國が、列強競争の間に仲間入が出来んのも無理では無い、吾々は何處までもこんな君子を退けねばならん、浩堂は、威儀嚴重に、袴の折目も亂れたらすと云ふ若紳士の様な奥ゆかしいのよりは、賄の様な風体で、大きな鐵棒を杖にして威張つてある方が好ましい、大きななりをして、相摸を取つて笑はる、小供らしのがよい、浩堂の近所には小供が澤山

居るが、其の中で極温順な、ソ―して親達の云ふ事をよく聞き分けて、飯を食ふ時にも食ひこぼさず、學校の覺も目出度成績も優等で、善い兒ぢやと噂されて親悦ばする小供よりは、親の仕付旁に不平ですねて、父爺の得意な掛物をた、き破つて、其の手で直ぐ隣りの小供を泣かせ、いたづら者よと近所合壁から爪弾きされて、親の胸傷めさする腕白小僧が一番すきである、つまり何でも勢よく、時によつたら亂暴も辭せん様でなくてはならぬ、所謂野蠻主義である、諸君が野蠻々と口々に悪く言ふのは少々間違つては居るまいか、書生の亂暴野蠻を非認するのは、書生を墜落せしめよと云ふのである、豚の如く猫の如き君子になれと云ふのである、野蠻に反對する者は書生の敵であつて、諸君は此種の人間に向つて大なる制裁を加ふる責任がある、浩堂は豚や猫の様な君子になつて、東洋の隅に屏居し自滅を待つよりは、寧ろ野蠻内閣を造つて世界の霸權を制しようと思ふ。

一部生諸君

諸君の中には法科もあまば文科もある、法科の人は職掌柄で口は達者じや、口を開けば必ず天下の事或は大臣とやらん或は公使も悪くもないとして口舌の間に帝國を大ならしめんと、其氣焔は到底寄り付かれた者では無い、しかし此位の法螺は、法科生でなくとも随分吹ける、其位の事に文部省は一枚な金を出して法科を設けて置くのではない、有数の歴史家や屈指の語學家は、法螺に巧ならしむる爲めに數授の勞を執るのでは無い、社會の智識が今では進歩して居つて、従つて其間の出來事も難澁になる、之の難局に立つて、事が間違はん様に處理するには非凡の人でも容易には行かぬ、ましてや少々理屈がわかつて居るからとか、議論が上手だとか、語學が氣の利いて居るからとか云ふ計りで、法科に入つて夫々の學科を習ふた位の事では、警部の拜命も覺束ない、先づ揮をしつかりとしめて、力の有らん限り張り込んで貰はん困る、

法螺を吹く暇には、經濟の一枚も讀んで貰つた方が國民に取つては餘程有難い、夫れでこそ一つやつて呉れと頼み甲斐もあるもの、夫に何をや、結構な熱を吹いて、一法螺吹けば償金が五億とか、二法螺吹るば露西亞が降参するとか、我儘な事斗り言つて本職は忘却して仕舞つて居る、丁度放蕩息子が父爺の前で惚氣を言ふのと同じ事である、此様な放蕩息子に天下の跡目相續をさせる譯には行かぬ、先輩の親達も心配する、我々下男下僕も落付かん、何分今少し眞面目にやつて欲しい、文科の諸君にも注文がある、外でも無いが生き學問をしてもらいたい、で云ふ生き學問は、現在流行の學問と云ふ意味では無い、死んだ學問と云ふのは「デッドラングー」の積りでは無い、界野な現實的小説が好きだと云ふなら仕方がないから作るのもよからう、叙情的の新體詩、優長吞氣な和歌、話し家的の發句、之れも道樂なら時々、やつても好いが、之を以て我事竭せりとはまり込む

様な事では、誠に沙汰の限り言語同断である。

### 二三部生諸君

「サイン」「ヨサイン」「工科生、ドイツランド、ホイテモルゲン三部生」と云ふ俚歌は、恰も法科生の駄法螺を表示すると同時に、之に對して二三部生諸君の頭腦の空虚であると云ふ事を謳へるものである、諸君の腦中には三角、代數、微分、積分、乃至は譯讀、解剖の何物も認められん事を嘲笑し、諸君の不見識を痛罵して至れりだ、諸君が大理學者となつて、大發明をやつて、名聲を博したいとか、癩病全治の良藥を發見したいとか云ふ希望は、道理至極で何も不足間は無い、併し此の希望より外には何にも無いとは情ない話である、成程學の奧義を究めた者は社會に便利であるに相違ない、又重寶かられるけれども、社會に取つて便利である点から言へば、瘋車、瘋船、電信、電話、別して無線電信などの方が余程便利である、一休社會上人物の價值は、其の見識と其の有する

### 百二

科學智識の相乗に比例すると言つてもよい、科學智識は如何程大きくあつても、見識が零であれば人物としての價值は失張零になる、位置が高くて、収入が多く、贅澤に此世を送れば夫で満足するならば、其日暮しの裏店住居も差したる相異は無い、社會を離れて氣樂にやる方を望むならば、親の財産を貰つて山家住するが數等上分別である、東雲坐に芝居見に行ぐ暇は毎日あつても、雜誌を讀む暇は無く、新聞の三面記事は讀むとも、一面の論説を讀む勇氣が無い、と云つて居る諸君の心事最早言ふは悉びなのである、浩堂は本學年一學期の演說會で、まずくはあつたが、一場の演說をして諸君に訴へた、其時諸君の耳に強過ぎてはならんと思つたから、わざと滑稽を混せて中和した處が、肝要な主意は耳に入らぬに滑稽斗りが拍手を得た、そこで諸君の腦中には、サイン、サイン及びホイテモルゲンを認めた外に尙ほ諸君が滑稽を好む事を確めた、同時に外には何にも無い事をた



しかめた、若し今言ふた事に不服があるなら、事實の上で證明して貰いたい、一部生に駄法螺の評あると同時に、二部生は無口で、三部生は世辭に巧だと云ふ評を辨駁する勇氣があるであらうか、將又諸君は之に甘せるであらうか、そんな事云ふ段には、字引の一も引くが好いといふのが我校の金言であるから、浩堂の此の言に對しても、不相變馬鹿な男が又しても憎まれ口を叩くと言はれるに違ひないが、浩堂は諸君が豕の如く猫の様であるのを可愛相に思ふ。

### 學寮運動部の活動

麗かなる春光にさうはれて遠足部が先づ活動の魁をしてから、其の他の運動部も我も我もと競ひ起つた。運動場の本場所では君の勿体らしい行司振と、排雲律師の『よく考へて』に笑聲とよめき渡つた相撲や、テニスマツチャ、ベースボールマツチ、フットボールマツチ、繩引會、何や、彼や、寮内の空氣も賑やかなものだ。學課や

ら、我やら、人やら、全く頭の端から打遣つて、小供の嘻嘻として樂しみ叫ぶ其の中に、自然と和氣霽々の情が霞の様に浮んで来る。運動、運動、運動は實に人をして無耶氣なる愉快と和親とを兼ね得しむるもの、「家族的團結を目的として各種の運動部を設け」と云つたのも全く此の精神に外ならない。

で表面は如何にも各運動部が其の共同の目的に向つて進みつゝあるかの様だが、併し其の實甚だ疑はしい。何故かならば運動者が極極少數で、殆ど一局部に限られて居るからである。會の時にも出る人は甚だ少あい、「終つて芋の御馳走は富士の山山」で引張りても小供ではなし一向出ない。何故だろら、嗚呼是れ大部分がまだ運動の妙味を知らないからではあるまいか。將た運動部の目的に忠ならざるからではあるまいか。諸子の一考を煩はすべき事であらう。

(運動生) 奉

工業振興策摺筆の辭、むげに國家の大問題を

稱へ、青二才の口癖に放言空言するものと、さげしめ給ふも理と存候、去りながら私自身だけは、第一篇豫全篇論は決して潜越の論に非ることを確信致し、飽くまで御一讀相煩はし度存居候處、殘念にも、其第二章第二節の不運さ、第八十三號の撰に漏れ、二月の廢刊に逢ひ、其又又候第八十四號の撰に漏れ、都合三回の休稿にも又拙ければ、さすがに其縁遠きを詰る譯に參らず、而して早一回の發行を以て、本會誌と永く名残りを裂くの運命に接し居候へば、到底初志貫徹致しがだく、依て已むなく、茲に擲筆致すことに致し候、有頭無尾の怪物を物して、貴重紙上を汚せし罪は幾重にも奉謝候、唯全く小生の怠惰の爲めに非ることを御承認の上幾分の御容赦奉仰候。雨村謹白

右挨拶狀が來たまふ全文を諸賢に御紹介する、雨村君よ、餘り殘念がり玉ふな、吾人は本誌の上で君の高説を終り迄聞々を得なかつたけれ共、後日君が改めて全國に向て此の國家的

大問題を論せらるゝのを聞き、又た實地に行はるゝのを耳を傾け眼を見張つて待て居る者である。

### 寄贈雜誌目錄

教育時論 第五七八、九、八〇號

教育公報 第二四七號

桃陰 第一五號

學友會報 第二二號

宇和島中學校校友會雜誌第八號

松風 一冊

尙志會雜誌 第四四號

嶽水會雜誌 第一一號

佐賀 第三二號

九州教育雜誌 第一七〇、七二、號

一校友會雜誌第一〇六、七、號

矯々會雜誌 第七三號

帝國文學 第五號

教育時論 第五八一五號